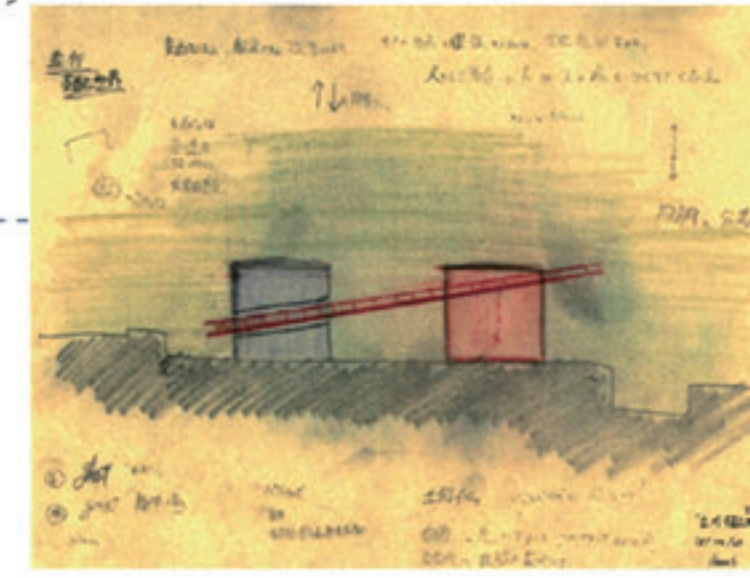
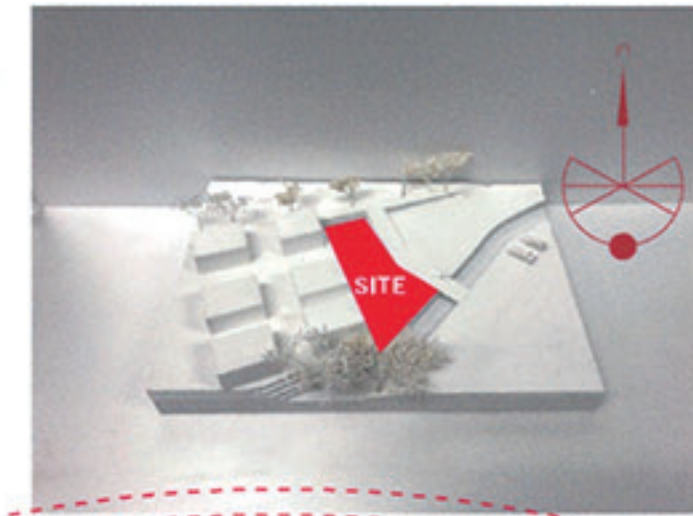
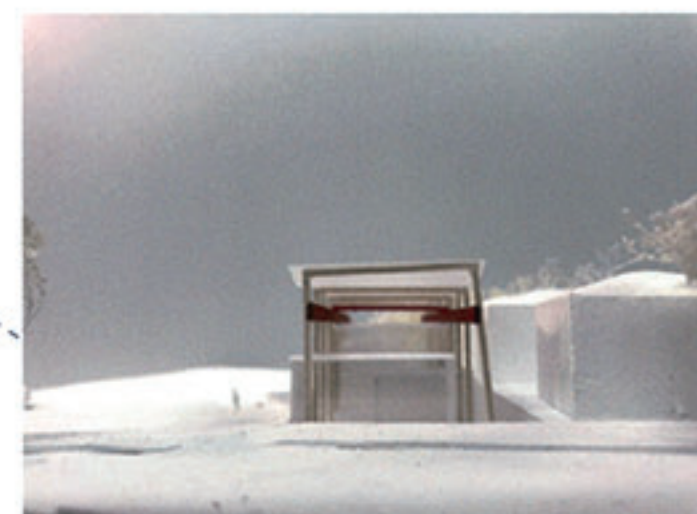
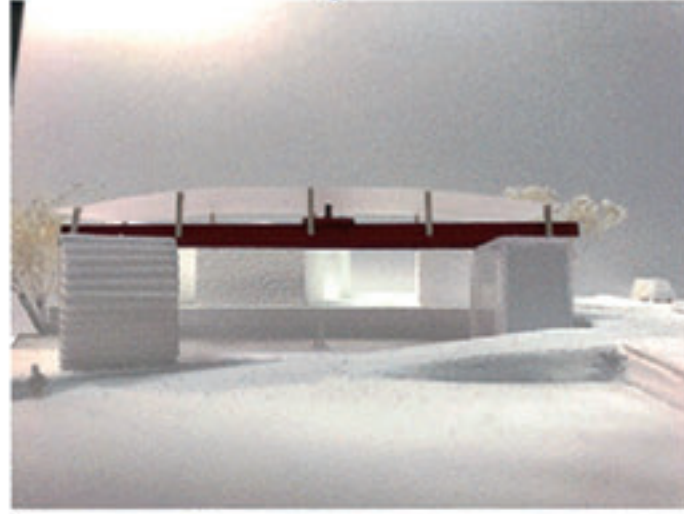
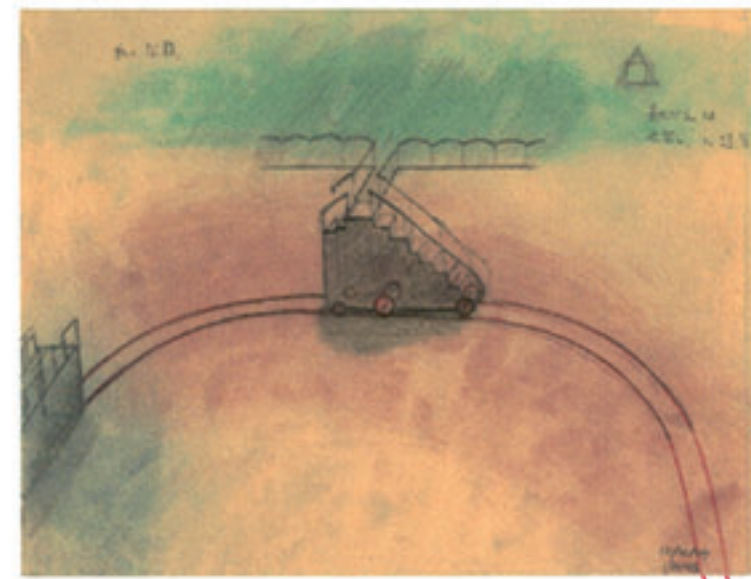


5/ 押し出す扉  
押し出すことによって扉が有する諸室の拡張をうむ。  
6/ 押し出す窓  
押し出すことによって、窓は外部にも所作をうむ。  
7/ 折り畳める間仕切り  
壁のように折りたたまれた間仕切りは、広げることで新たな諸室として生まれる。  
8/ 選別するとびら  
その時々状況や対象によって開け方を選べる扉。



3/ 貫くクレーン  
冒頭で説明したような使い方でなく、工房・住宅・ギャラリー・外部を貫くクレーンは運搬の際に工房にある作品を外部に移動させることや、資材搬入の際に外部から工房内に動かすこともできる。また工房からギャラリーに動かす際も同様である。  
4/ 浮遊する戸  
作業場やギャラリー、住宅の拡張として上部レールに沿って戸を動かして場をつつらえる。



// 準動的装置と建築 //

彫刻家の工房を設計する。

求められるプログラムは、工房・住宅・ギャラリーである。

ふと、彼が使う「道具」や「機械」が目についた。

彼が使う彫刻刀は脳内のイメージを具現化するために滑らかに手と同化しているように思えた。

彫刻物を上下に動かし、身体に最も整合する位置に定めるためにクレーンを使うのだが、

その昇降操作を担う押しボタンは彼の彫刻をつくるときの所作のように彼の息遣いや鼓動がクレーンに連動している。

そのような「身体」と呼応するような情景や場に美しさを感じた。

身体拡張にも思えた「道具」や「機械」は、「身体」と同調し身体構造もしくは生命体のようにも感じられた。身体と対象、環境を結びつけ呼応する道具の図式は、建築と環境を結びつける扉や窓などの「建具」と同義ではないか。

そして、建築もまた環境と身体を結びつけるものではないだろうか。

つまり、人の手によって動作する他律的な道具や機械、建具などを【準動的装置】といえ、

人の目的・意志・思想にそって型どられる建物を【静的装置】といえるのではないか。

更に、自然環境や人などは刻々と変わる【動的装置】といえるのではないか。

【静的装置】

建築をつくる時、人間主体の目的に従属する受動的な建築、場所になってしまうことは逃られない。

そのことは lily foot (lily: ユリの花) と呼ばれる中国の若い女性に対して行われていた纏足や

西洋のフォーマルな靴として男性が上品に歩けるように足先がすぼむように小さくカットされている、

オックスフォード・シューズなどと同じであるように思える。

つまり、靴も建築も身体への拘束としての拷問というフェティシズムの慣習の「不快感」と「マゾヒズム的な享楽」として存在する。

しかし、マゾヒズム的享楽・支配は内包的に解放されることへの切望を孕み、絶えず人間は「主体的」にならうとする。

【動的装置】

常時的に訪れる風や一日周期で変化する日の光、一年を通して訪れる四季、さらには人の時間軸を超えた災害があり、

自然環境はそのような多層的な時間軸を内包している。そこには人間の時間軸を定義しようとする行為がうまれる、

つまり自分の居場所を見つけ、作るといった人間の主体性が生まれる。

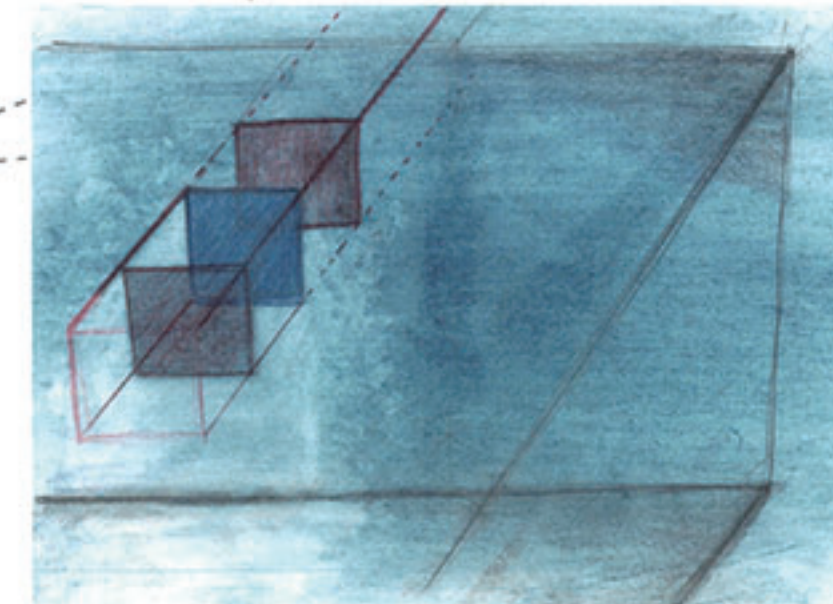
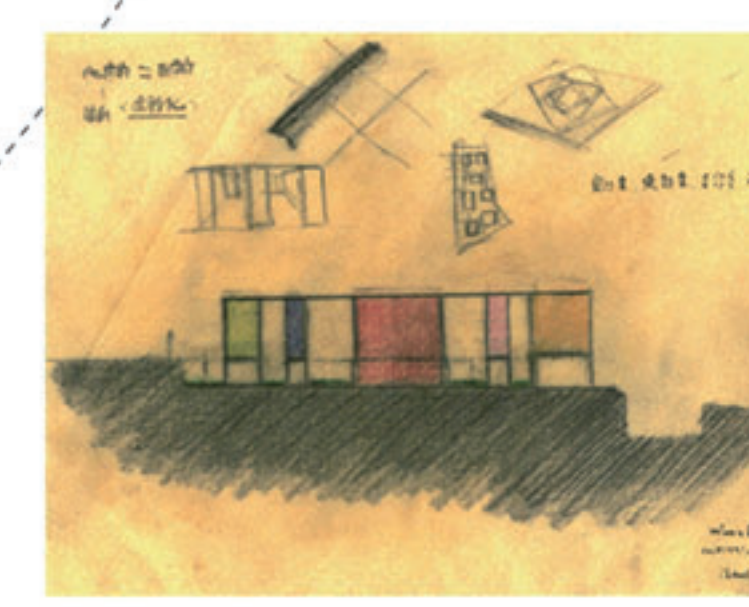
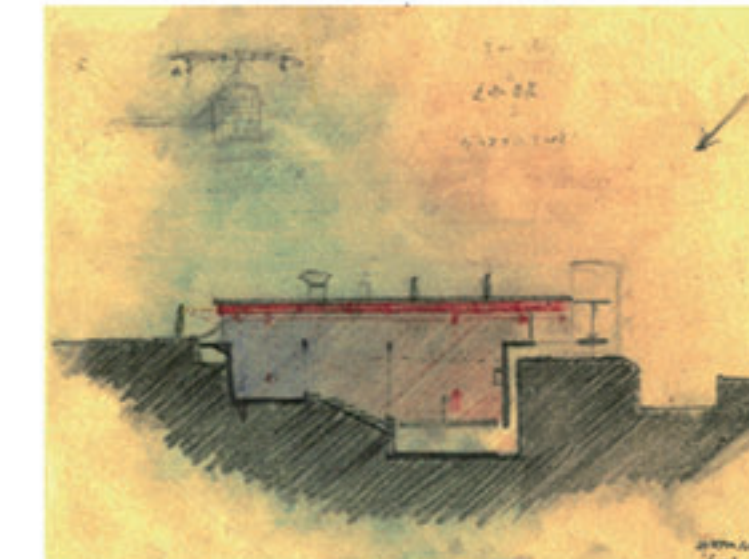
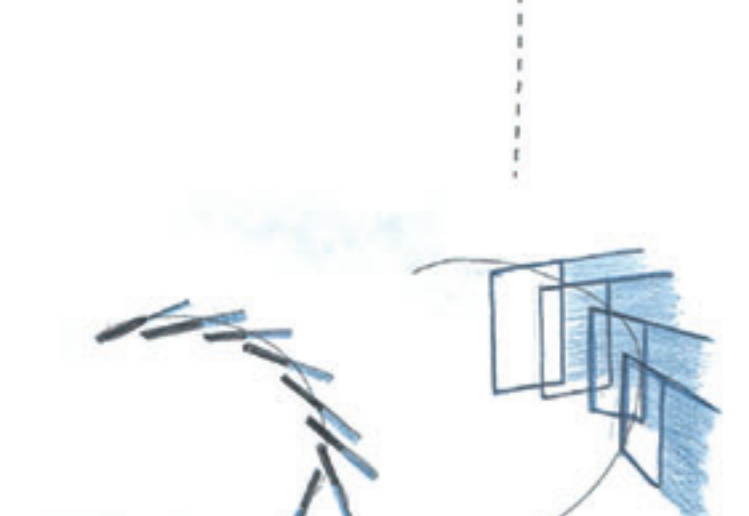
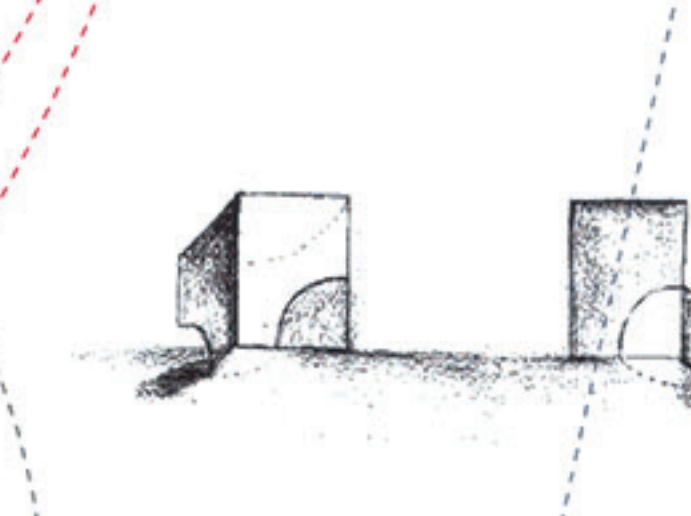
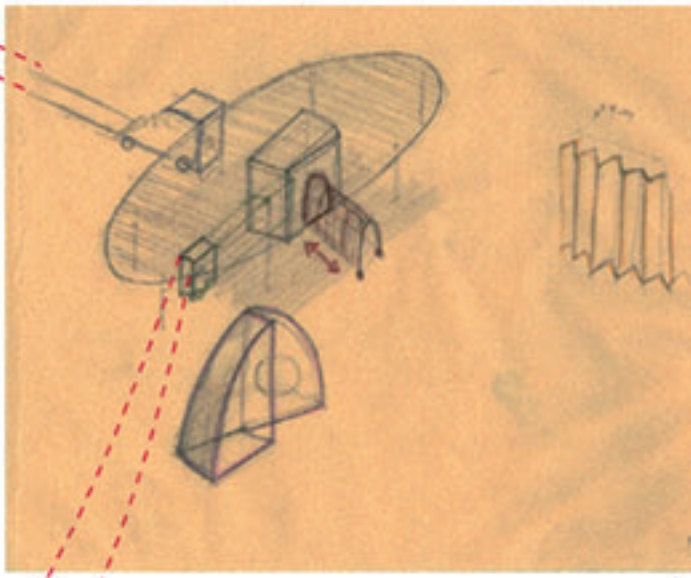
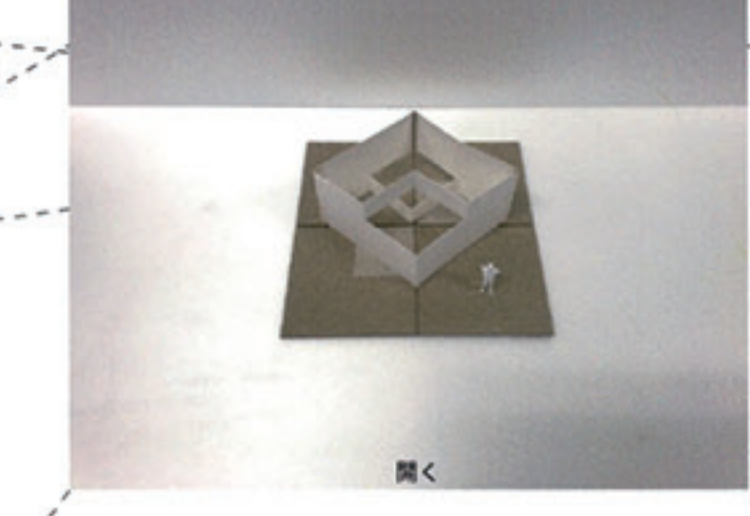
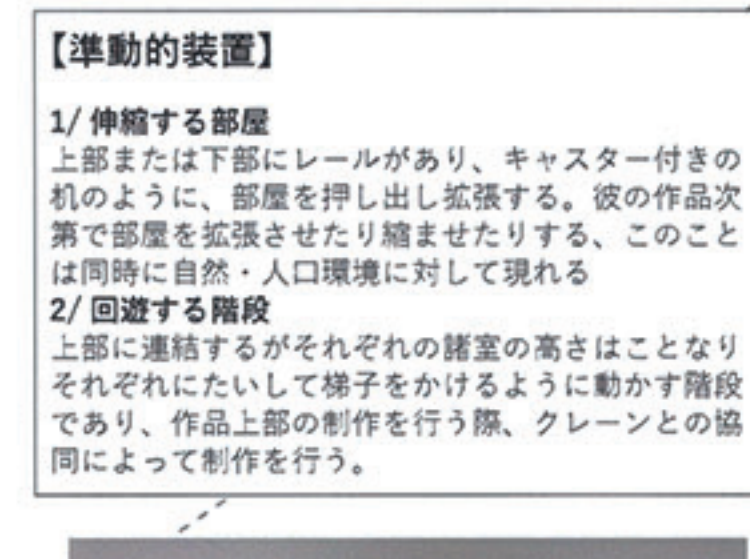
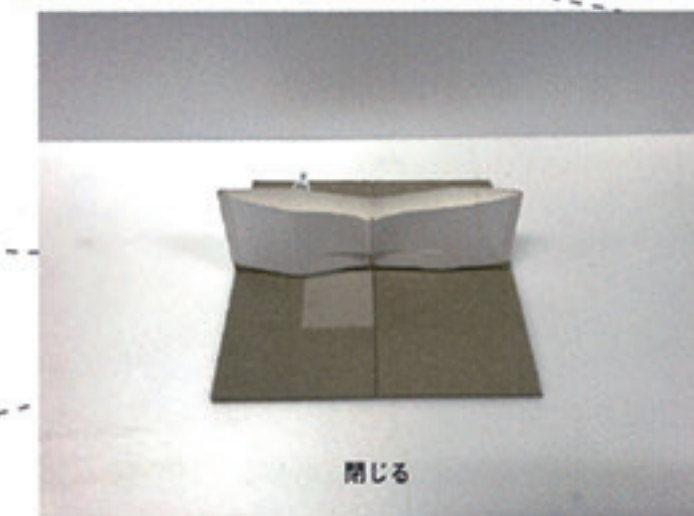
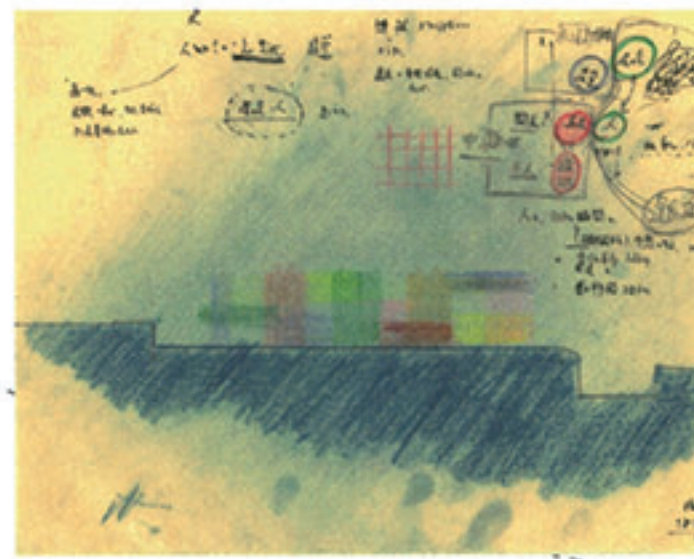
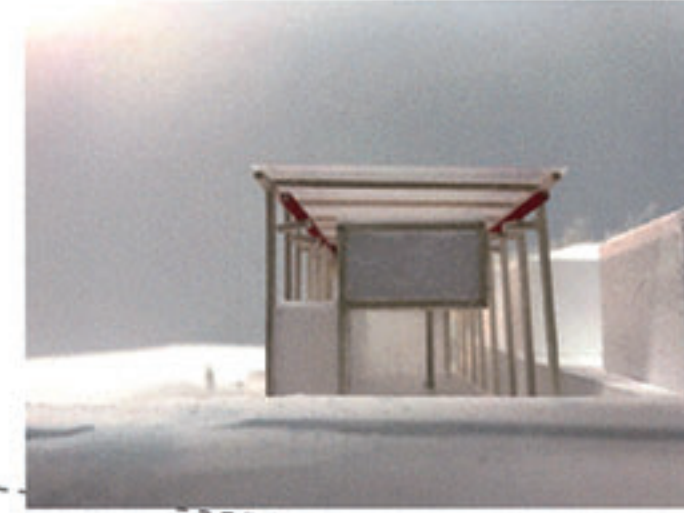
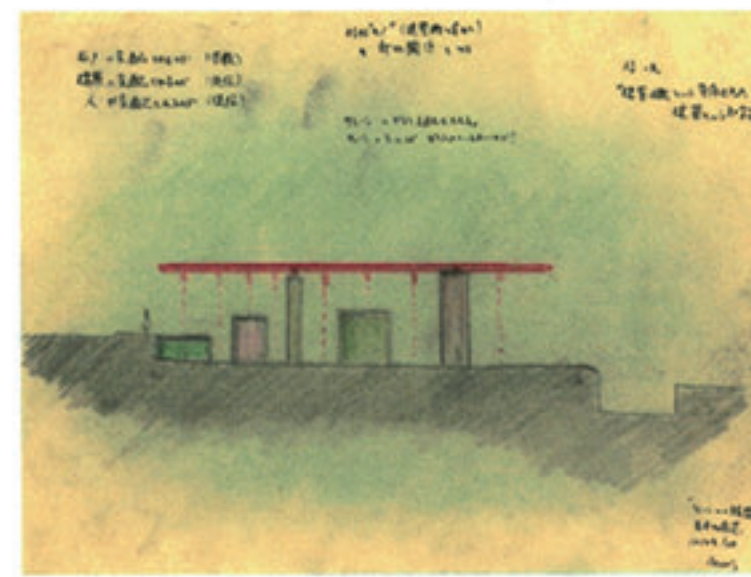
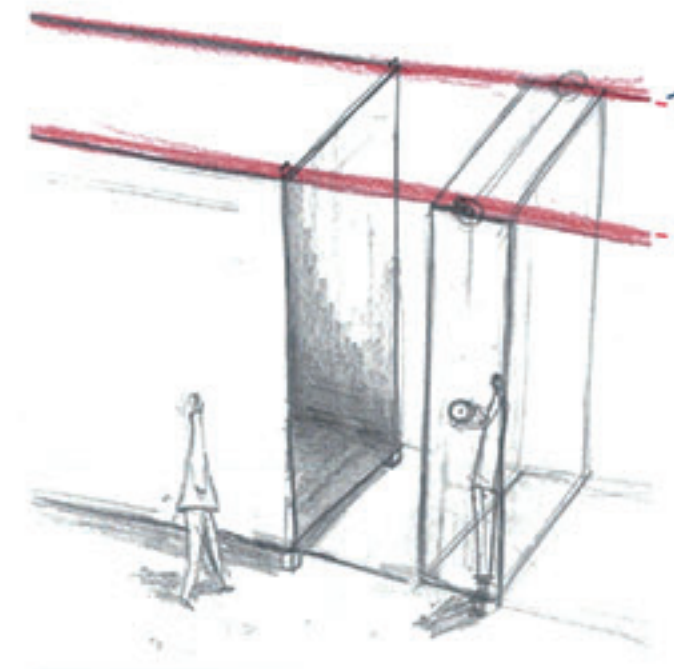
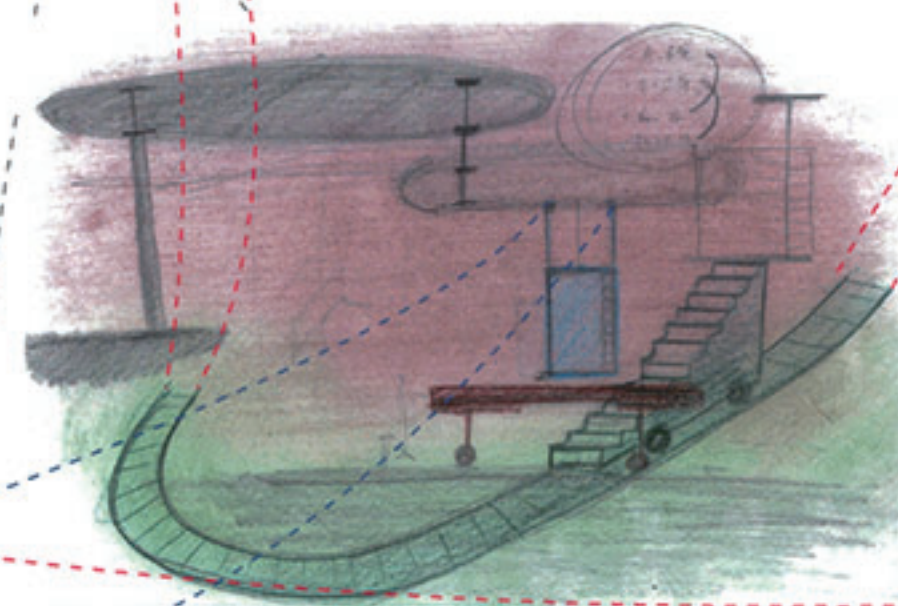
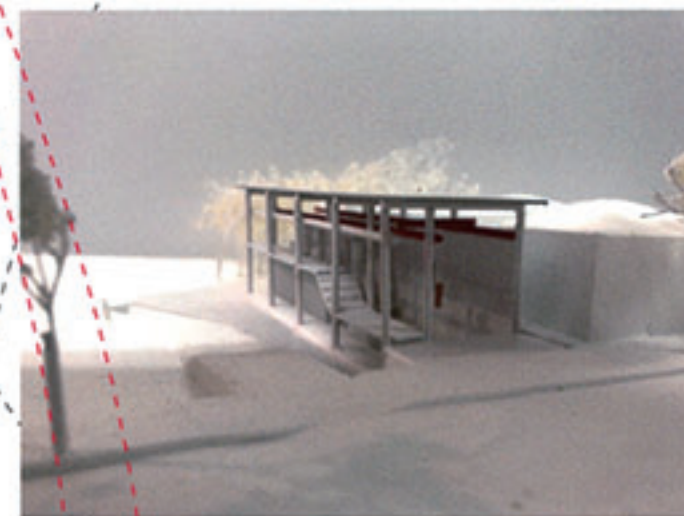
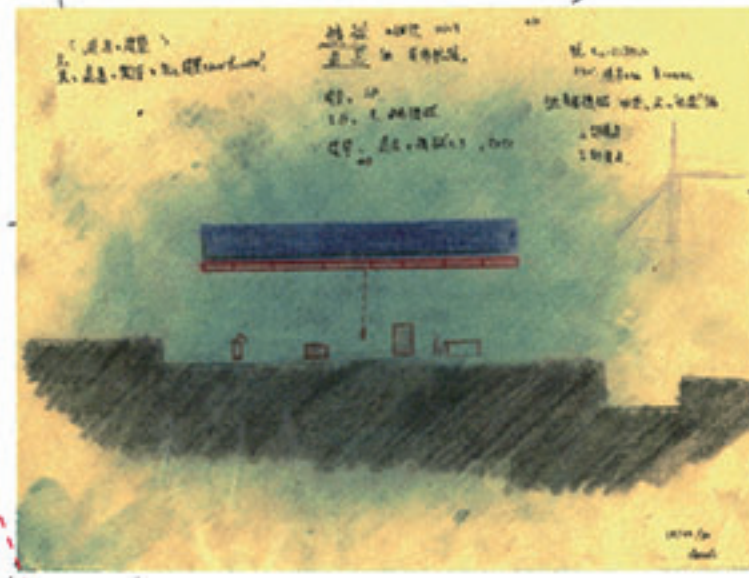
しかし、そこには安心や安全、静的装置としての高機能性を望むことも孕む。

上記二つには人間の主体性が孕み、喜びや苦難が内包されている。

それらを飲み込むように「身体」と呼応し揺れ動きながら行む「準動的装置と建築」を提案する。

9/ めくる戸  
大きく開かなくても扉は入るし、そっと体を滑り込ますように開ける扉

10/ 動く天井  
開放的に制作をしたいときや、制作設備の影響で閉鎖的にせざる負えないとき、場合ごとによって選べる天井。横にスライドした天井は外部にとつてのキャノピーにもなりうる。



これらの準動的装置は道具と同様、想定される用途以外に使用者によっていくつかの未知の使用法がいくつかある。それは住みこなしていくことで徐々に身体と同調しさらに拡張されていく。